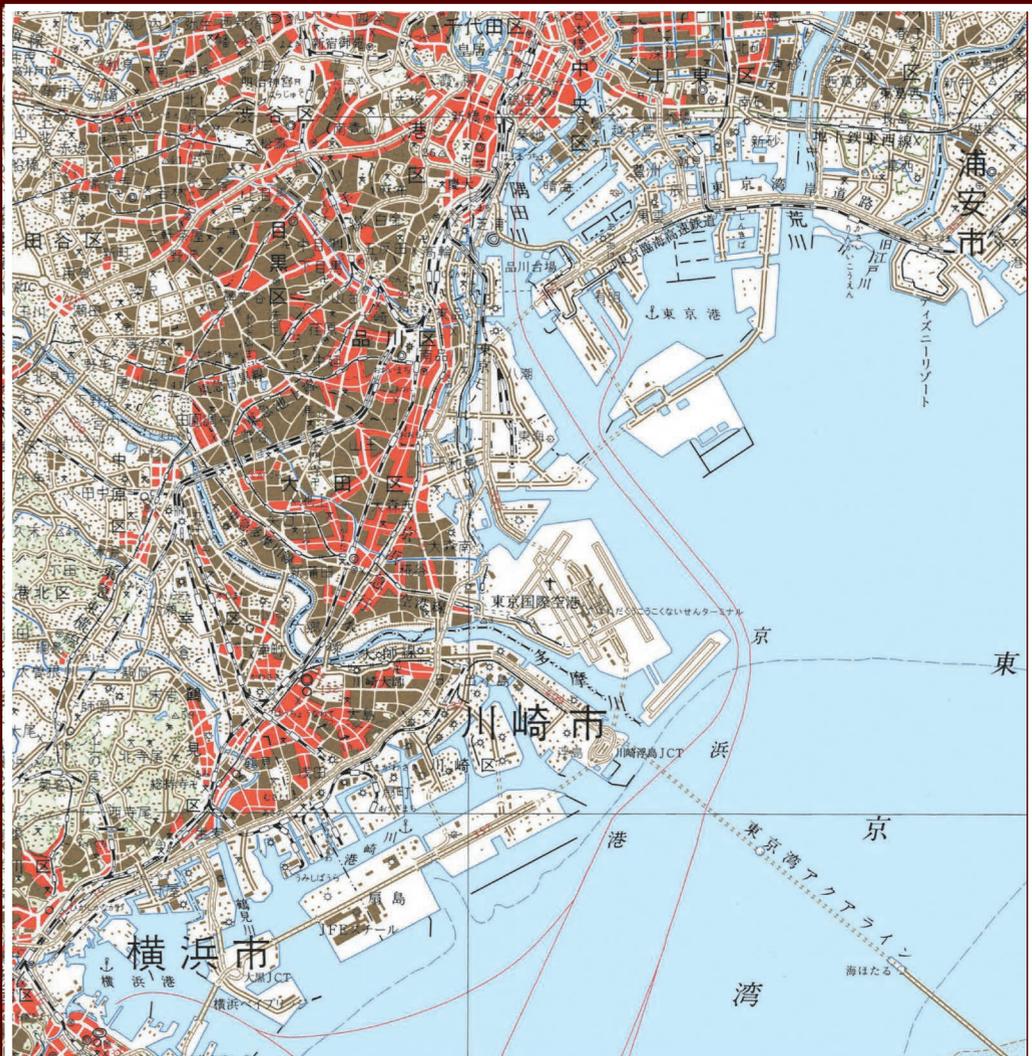


# 読みたくなる「地図」

国土編

◆ 日本の国土は どう変わったか

平岡昭利 編



海青社

## はじめに

地図は表象された空間の事実を縮尺し記号化したもので、実際の空間とは異なるものの、1枚の地図でトータルな空間の把握が可能になることから、その利用価値は高い。とくに国土基本図としての地形図は、1880年(明治13)の迅速図、それに続く仮製図や輯製図の作成以降、国の事業として今日まで継続して発行され、国土全域をカバーしている。

かつて物理学者の寺田寅彦は、世の中で安いものを列挙すれば、その筆頭に挙げられるものの1つは、5万分の1地形図とし、「その1枚から、われわれが学び得る有用な知識は到底金銭に換算することができないほど貴重なものである」(『寺田寅彦随筆集』第5巻)と述べている。

実際、その時代、時代で発行された地形図は、作成当時の世相を反映し、地域の姿や情報を伝えている。それゆえ古い地形図は、現在の風景の謎を解く鍵でもあり、風景の歴史を探る楽しみを与えてくれる。じっくり見れば見るほど味がある。

この古い地形図と現在の地形図の「時の断面」を比較することにより、我々が住んでいる地域は、どのように変貌してきたのかを視覚的にとらえようとの主旨のもとに、2008年に『地図で読み解く 日本の地域変貌』、さらに2017年に、そのハンディタイプ版として『読みたくなる「地図」——日本の都市は どう変わったか』のタイトルで、東日本編、西日本編の2冊を海青社から刊行した。これらの本は、見開きの左の頁に古い地形図、右の頁に現在の地形図を配置する比較の手法を取り入れたもので、そのことが読者に興味を持っていただいたのか、いずれも増刷に至った。

今回、その姉妹編として広く国土の変貌を捉えるため、5万分の1地形図、20万分の1地勢図や輯製図などを用いた『読みたくなる「地図」国土編——日本の国土は どう変わったか』を刊行することにした。古くから日本人は限られた国土のなかで原野を開拓し、海を干拓、埋め立てるなど生活空間を拡大するとともに、さまざまな産業を生み出してきた。だが、今日、日本は人口減少社会に突入し、生活空間も縮小へと向かうなか、本書は、これまでの国土政策を振り返る足がかりとなるよう、国土の変貌を「地図で読む」ことを意図した。本書を手がかりに読者が新旧の地図を比較することによって、いくらかでも地図に興味を覚えられれば、編者にとって望外の喜びである。

2019年2月10日

平岡昭利

## 編者・執筆者一覧

### 編者

平岡昭利 下関市立大学名誉教授

### 執筆者 (50音順)

天野宏司 駿河台大学・現代文化学部  
 五十嵐勉 佐賀大学・全学教育機構  
 奥平理 函館工業高等専門学校  
 北村修二 久留米大学・比較文化研究所  
 酒井多加志 北海道教育大学・教育学部・釧路校  
 末吉健治 福島大学・経済経営学類  
 助重雄久 富山国際大学・現代社会学部  
 高木亨 熊本学園大学・社会福祉学部  
 田林明 筑波大学名誉教授  
 千葉昭彦 東北学院大学・経済学部  
 友澤和夫 広島大学・文学研究科  
 中條暁仁 静岡大学・教育学部  
 中西僚太郎 筑波大学・人文社会系  
 藤永豪 西南学院大学・人間科学部  
 丸山浩明 立教大学・文学部  
 三木剛志 日本離島センター  
 三木理史 奈良大学・文学部  
 宮内久光 琉球大学・国際地域創造学部  
 元木理寿 常磐大学・総合政策学部  
 矢野正浩 志学館中・高等部  
 山下克彦 北海道教育大学名誉教授  
 山下清海 立正大学・地球環境科学部  
 山田浩久 山形大学・人文社会科学部  
 湯澤規子 筑波大学・生命環境系

# ● 目次 —— 読みたくなる「地図」 国土編

はじめに..... 1

## 北海道

- 1 名寄・士別 —— 北限の米作地帯..... 4
- 2 根釧台地 —— 先進酪農地域の成立..... 6
- 3 標茶 —— 集治監の町と開発..... 8
- 4 夕張 —— 旧産炭地のその後..... 10
- 5 洞爺湖・有珠山 —— 火山とともに暮らす..... 12
- 6 江差 —— ニシン漁の盛衰と大神宮祭の街..... 14
- 7 天売島・焼尻島 —— ニシンの去った島々..... 16

## 東北・関東

- 8 八郎潟干拓地 —— 大潟村の誕生と変容..... 18
- 9 飛島 —— 少子高齢化社会のフロンティア..... 22
- 10 猪苗代湖と安積疏水 —— 疏水と近代化..... 24
- 11 東京湾 —— 陸の拡大・海の縮小..... 26
- 12 霞ヶ浦・利根川下流 —— 水の地域の変貌..... 30
- 13 九十九里浜 —— 納屋集落とイワン漁..... 34
- 14 三宅島 —— 火山と共存する島..... 36

## 中部・近畿

- 15 木曾川・長良川・揖斐川 —— 輪中と治水..... 38
- 16 牧ノ原 —— 日本一の茶産地..... 40
- 17 甲府盆地 —— 桑畑からぶどう畑へ..... 42
- 18 野辺山高原 —— 高原野菜産地の形成..... 44
- 19 黒部川扇状地 —— 水が育む産業と生活..... 46
- 20 砺波平野 —— 交通の発達と散村の変貌..... 50
- 21 大阪湾 —— 「天下の台所」の門前..... 52

## 中国・四国

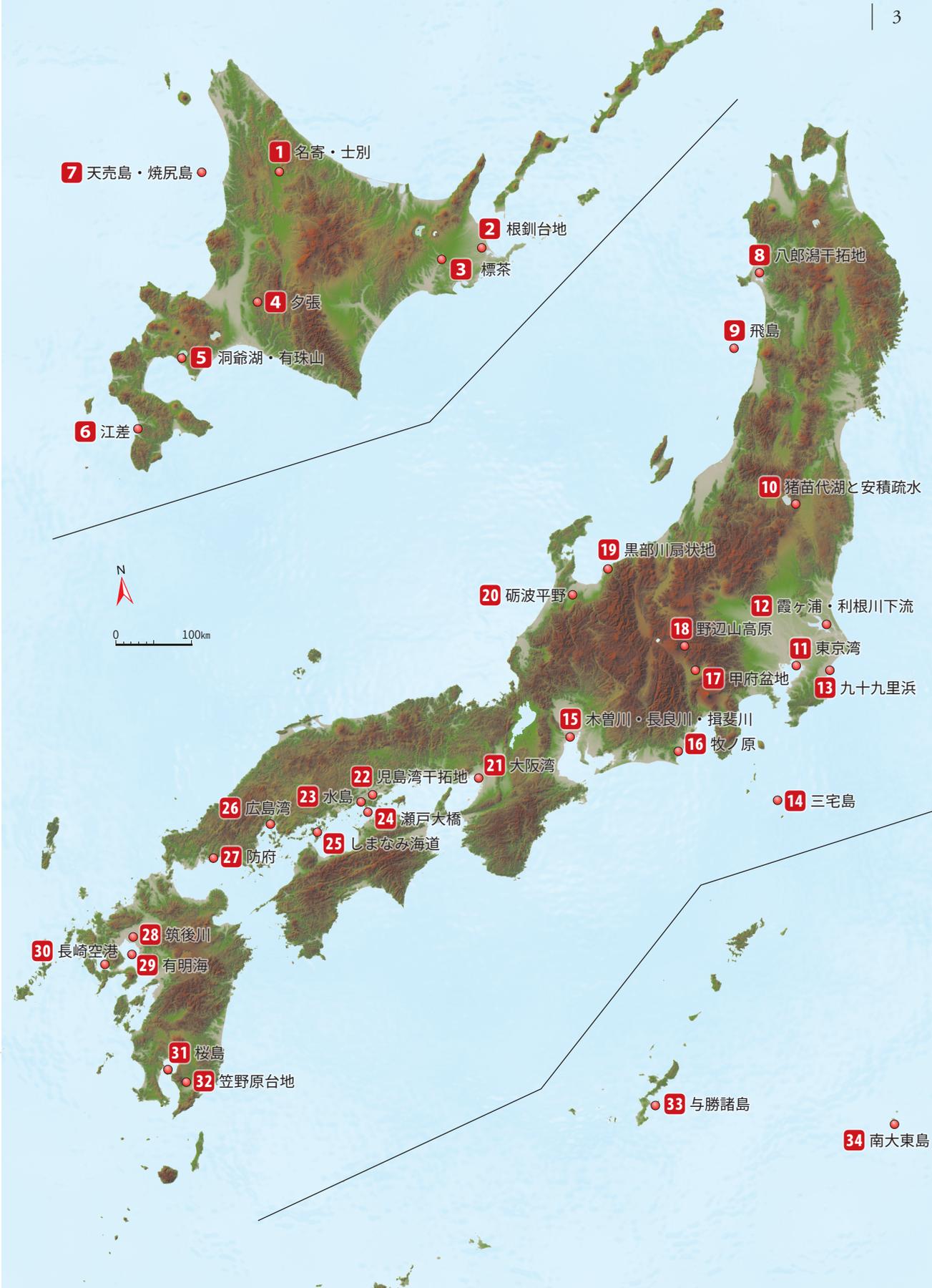
- 22 児島湾干拓地 —— 島から半島へ..... 56
- 23 水島 —— 工業化の舞台..... 60
- 24 瀬戸大橋 —— 架橋と橋脚の島々..... 62
- 25 しまなみ海道 —— 尾道と今治を結ぶ..... 66
- 26 広島湾 —— 要塞化した海..... 68
- 27 防府 —— 歴史的都市と塩田の変貌..... 70

## 九州・沖縄

- 28 筑後川 —— 水害に耐え、流域を支える..... 72
- 29 有明海 —— 日本最大の干潟と干拓..... 76
- 30 長崎空港 —— その土台となった島..... 78
- 31 桜島 —— 噴火で陸続きに..... 80
- 32 笠野原台地 —— シラス台地の開拓..... 84
- 33 与勝諸島 —— 橋で結ばれた4つの有人島..... 86
- 34 南大東島 —— 無人島の開拓史..... 88

20万分の1 輯製図・地勢図 地図記号..... 90

5万分の1 地形図 地図記号..... 92



北海道

東北・関東

中部・近畿

中国・四国

九州・沖縄

このプレビューでは表示されないページがあります。

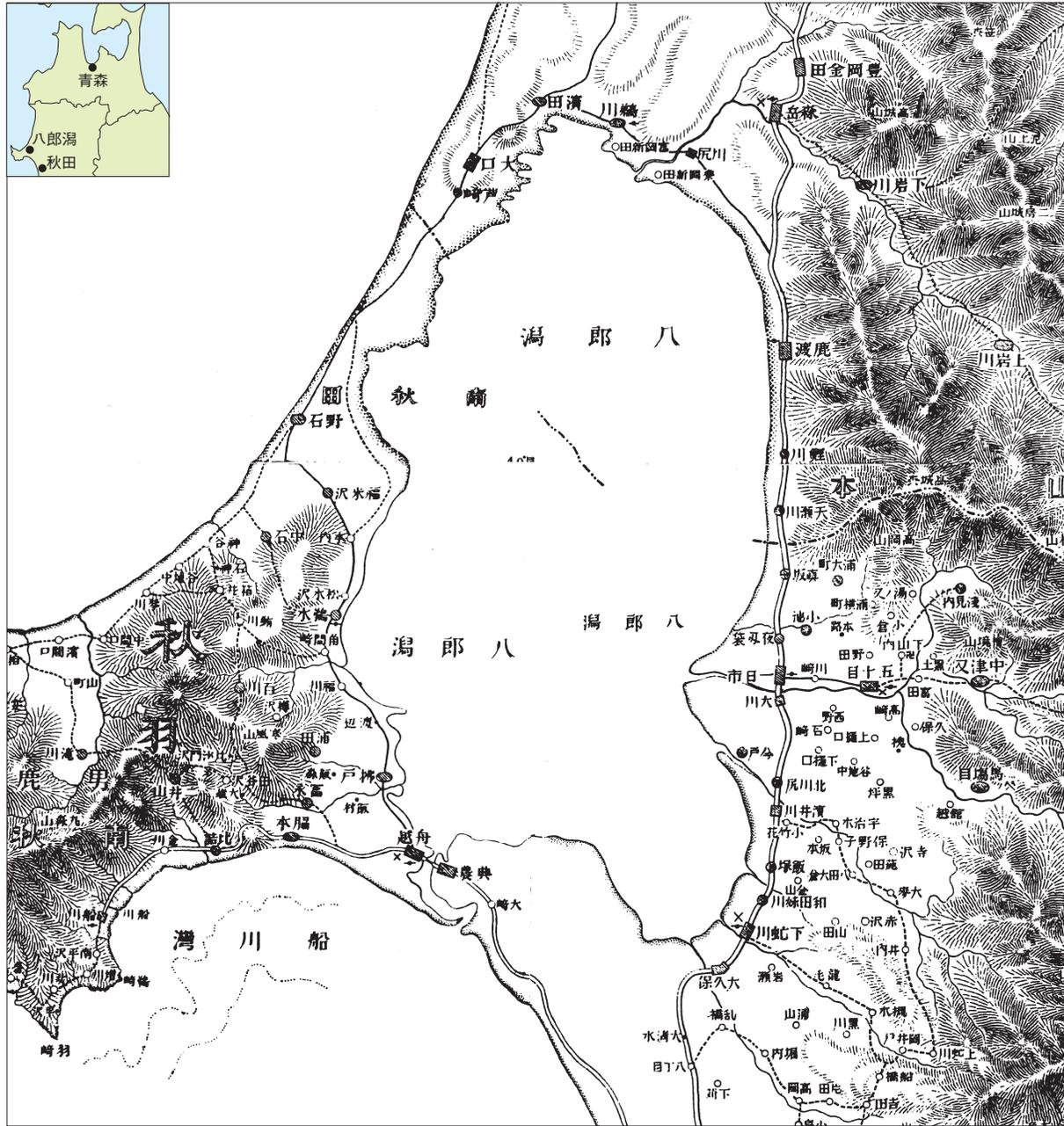


図8-1 1889年頃の八郎潟 (20万分の1 輯製図「秋田」明23年輯、「弘前」男鹿島明22年輯、原寸)

### 8. 八郎潟干拓地——大潟村の誕生と変容

大規模な干拓工事が行われる以前の八郎潟は、東西12km、南北27km、琵琶湖に次ぐ日本第2の面積(総面積2万2,024ha)をほこる湖であった。八郎潟は雄物川と米代川の流出土砂などで、男鹿の島が陸繋島になって形成された海跡湖であり、南部の船越付近で日本海に通じており、淡水と海水が混じり合う汽水湖(半かん湖)であった。

八郎潟の水深は浅く、最も深い所でも4~5mほどであり、しかも湖底は平坦であった。このため、八郎

潟は干拓しやすい条件を備えており、古くから幾度となく干拓が計画されてきた。しかし、大規模干拓が実行に移されたのは、食糧事情がひっ迫した第2次世界大戦後のことである。干拓地(ポルダー)が多く、干拓工事先進技術を有していたオランダの技術協力を得て、1957年(昭和32)から国営事業として、わが国最大の農村計画である八郎潟の大規模干拓事業が始まった。

1963年(昭和38)に中央干拓堤防が完成し、翌1964年、干拓前は湖底であった中央干拓地に地方自治体として「大潟村」が誕生した。1977年(昭和52)、総事業



図8-2 2012年頃の八郎潟干拓地 (20万分の1地勢図「深浦」男鹿「秋田」平16修、「弘前」平24要修、原寸) 0 4km

費852億円を投入した大規模な干拓工事は、20か年に及ぶ歳月をかけて完了した。もとの八郎潟の約4分の3が干拓され、残りの湖面が調整池(残存湖)や承水路として残された。日本海と八郎潟とを結んでいた船越水道には、大きな防潮水門がつけられた。これにより、日本海から調整池に海水が入り込むのが阻止され、調整池の水が淡水化され、これを農業用水として使用することが可能となり、大潟村も周辺の農村も水不足の心配から解放された。

大潟村は全域が海拔ゼロメートル以下にある。大潟村を取り囲む堤防は、軟弱なヘドロの上に厚さ十数

メートルの砂を置き、その上にさらに数メートルの盛り土をして造成されたものである。大潟村役場や住宅、公共施設などが集中している総合中心地(集落地)の海拔も-1mである。

もともと大潟村がつけられた目的は、「干拓してできた大地に、日本農業のモデルとなるような生産性および所得水準の高い農業経営を確立して、豊かで住みよい近代的な農村社会をつくる」ことであった。この目的に賛同して、大潟村への入植希望者が全国各地から集まり、多数の応募者の中から入植者が選ばれた。

1966年(昭和41)、最初の第1次入植者56名が選ば

北海道  
東北・関東  
中部・近畿  
中国・四国  
九州・沖縄

北海道  
東北・関東  
中部・近畿  
中国・四国  
九州・沖縄

このプレビューでは表示されないページがあります。

### 11. 東京湾—陸の拡大・海の縮小

2枚の図を見比べて、一目瞭然なことがふたつある。ひとつは、海が小さくなった—すなわち、埋め立てが進行し、陸地部分の拡大=海洋部の縮小が行われた—ことがわかる。

単純に、千葉県・東京都(東京府)・神奈川県の陸地面積を比較すると(表11-1)、図11-1の作成された1887年(明治20)前後、「府県統計書」によると三府県合計で8,488.15km<sup>2</sup>の面積を有する。これが2017年になると国土地理院の「全国都道府県市区町村別面積調」で9,361.16km<sup>2</sup>と、873.01km<sup>2</sup>も面積が増えていることがわかる。2017年段階で、一番小さな香川県の面積が1,876.77km<sup>2</sup>なので、その半分近くが1887年から2017年の約130年間で増えたことになる。数字はあくまで、都県全体を示したもののなので、図11-1・2の図郭範囲外も含まれるが、埋め立てのほとんどが東京湾で行われていることを考えると、その進行が顕著であることがわかっていく。

もともと東京湾(江戸湾)は浅瀬であり、埋め立てに適していた。江戸築城時には、堀の掘削土を使用し、また、江戸期を通じゴミ・貝殻を利用しての埋め立てが行われていた。実は、図11-1でも埋め立ての歴史が確認できる。品川沖に七つの陸地が点在している。これが品川台場(図11-2)、現在の東京臨海副都心地区である。遠浅な海が広がっていた様子は、図11-1で確認可能である。多摩川・江戸川・養老川・小櫃川などで運ばれた土砂が堆積している姿が確認できよう。

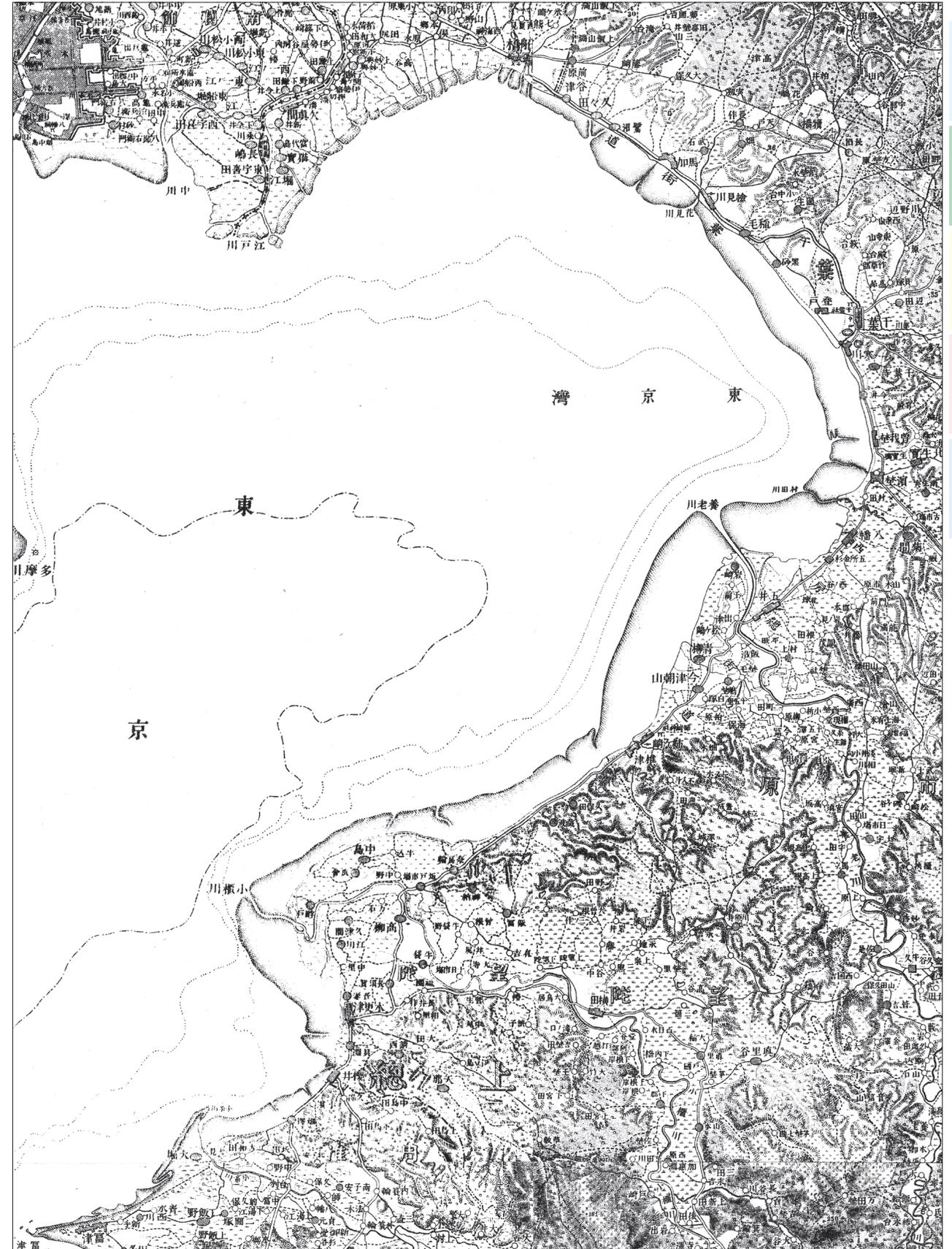
一言で「東京湾」と呼称するが、流入する土砂により水深が浅く大型船が停泊できなかった東京港と、水深が深くかつ開港場に指定され大型船が停泊可能であった横浜港といった地域的差異は存在していた。1923年(大正12)の関東大震災の際にも、救援船が東京港に停泊できず、解体作業で困難を極めたことから東京築港の必要性が喚起され、高度経済成長期を通じ埋め立て地の拡大が続く。この埋め立てには、大型船の停泊を可能にするために、海洋部で行われた浚渫作業による土砂とともに、川砂、後に山砂が使われるとともに、都市部で大量に発生するゴミが最終処分され埋め立てられていった。

一方で、埋め立ての進行は、埋め立て地の帰属について問題が顕在化することもある。たとえば、東京都中央防波堤地区は、当初、江東区・大田区・港区・品川区・中央区の協議で帰属が決まるはずだった。2018年現在、港区・品川区・中央区は帰属協議から撤退、一方、江東区・大田区は、中央防波堤地区全部の帰属を主張し、帰属問題は不透明である。

明瞭な差異のふたつ目が、都市部の拡大・伸張であ



図11-1 1888年頃の東京湾 (20万分の1輯製図「東京」明21輯、



「佐倉」明20輯、「横須賀」「大多喜」明19輯、原寸)

北海道  
東北・関東  
中部・近畿  
中国・四国  
九州・沖縄

北海道  
東北・関東  
中部・近畿  
中国・四国  
九州・沖縄

る。図11-1が作成された1887年(明治20)前後、市街地が大規模に集積しているのは、東京と横浜ぐらいであり、神奈川県内で川崎、東京府内で大森、千葉県内で舟橋・馬加(幕張)・検見川・千葉などで小規模な集積が見られるだけである。東京においては、都市の接続が始まっており、品川・大崎・渋谷・内藤新宿(もしくは中野・角筈)・巣鴨・千住・亀戸・砂村あたりまでが東京市と一体化しているのがわかる。これが、図11-2の段階では、東京―川崎―横浜は連続した都市になりその境目を見いだすことは出来ない。東京―千葉方面は、都市の連続性は確認できないものの、事実上一体化しているといえよう。

図11-3は、2017年の国勢調査による流動人口を示したものである。都県全体の数字ながら、千葉県・東京都・神奈川県の1都2県相互間において、県内・他都県での就業・通学をする人口を示した。同一都県内で就業・通学をしている人口が最も多いながら千葉県境を超え東京都内に流入する人口が71.7万人、同じく神奈川県境を超え東京都内に流入する人口が106.9万と流動性が高まっている。(天野宏司)

<sup>1)</sup> 1878(明治11)年に、島嶼部は東京府の直轄地となっているものの、1887年『東京府統計書』中に島嶼部の面積に関する記載は無い。従って2017年の数字からも島嶼部の数値を除いた。

表11-1 陸地面積の変化

	千葉県	東京都*	神奈川県	合計
1887年	4,909.45	1,424.97	2,153.73	8,488.15
2017年	5,157.61	1,787.38	2,416.17	9,361.16
増加面積(km <sup>2</sup> )	248.16	362.41	262.44	873.01

1887年：各府県統計書、2017年：「全国都道府県市区町村別面積調」により天野作成。

\*1887年当時、西多摩郡・北多摩郡・南多摩郡は神奈川県の管轄であった。本表では、この3郡について、現在にあわせ東京都に含めている。また、1887年当時の統計数値には、島嶼部を含まない。このため2017年の統計数値から、島嶼部に関する面積を除いている。

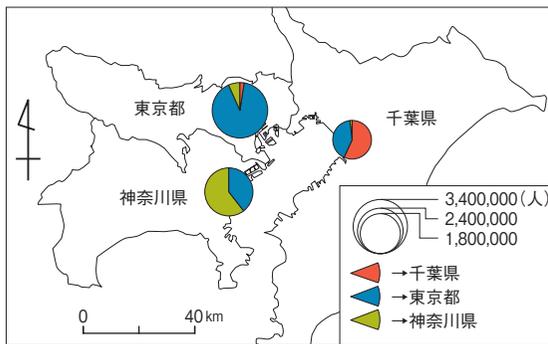


図11-3 東京都・千葉県・神奈川県における流動人口  
平成27年国勢調査により天野作図



図11-2 2012年頃の東京湾 (20万分の1地勢図「東京」平24要修、



「千葉」平22修、「横須賀」「大多喜」平23要修、原寸)

北海道  
東北・関東  
中部・近畿  
中国・四国  
九州・沖縄

北海道  
東北・関東  
中部・近畿  
中国・四国  
九州・沖縄

このプレビューでは表示されないページがあります。

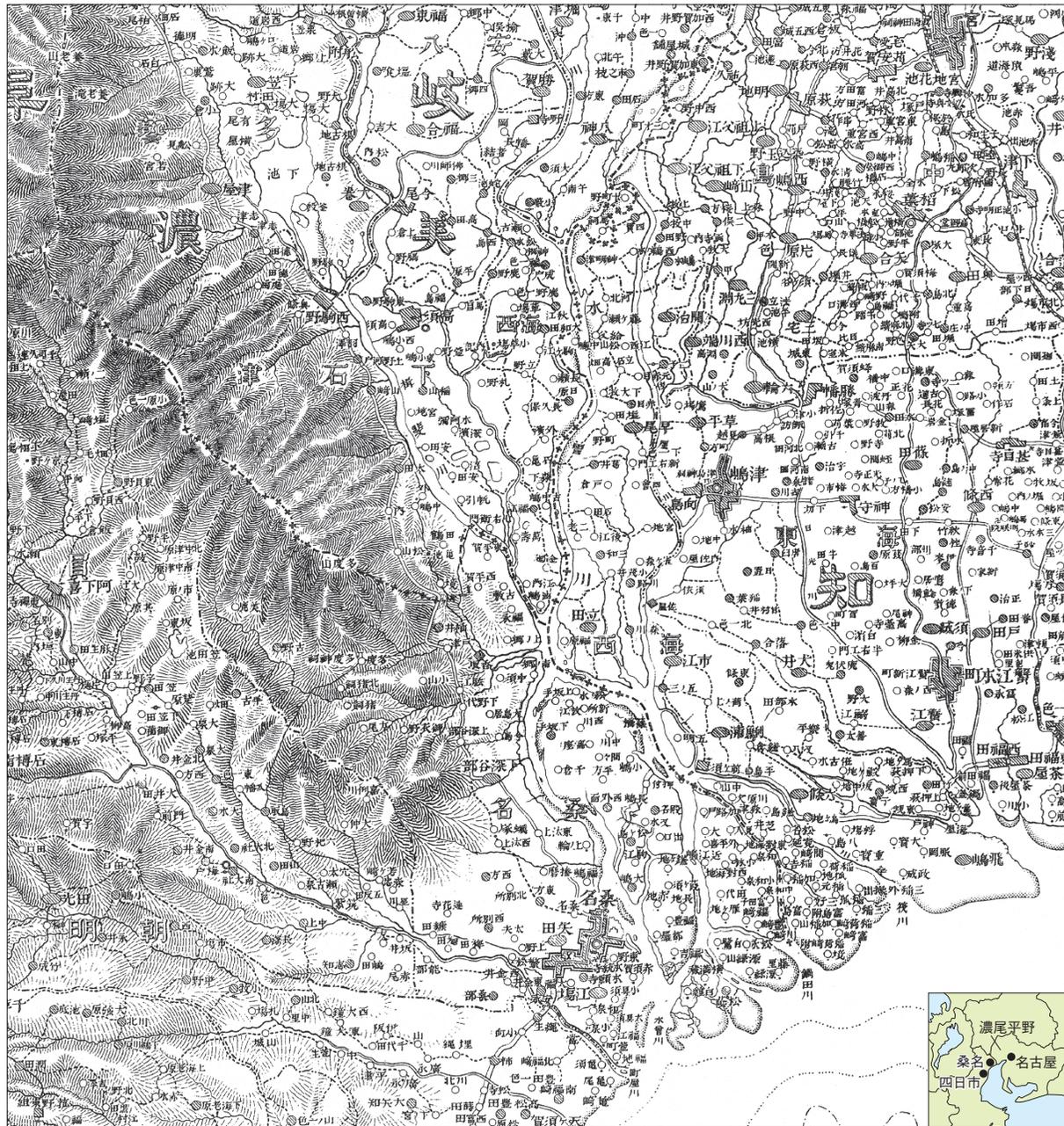


図 15-1 1886年頃の輪中地帯 (20万分の1 輯製図「名古屋」明19輯、×1.05)

### 15. 木曾川・長良川・揖斐川——輪中と治水

濃尾平野の西部、木曾川・長良川・揖斐川の中、下流域は標高も低く、洪水の常襲地帯であった(図15-1)。このため水害から集落や耕地を守るため、堤防を周囲にめぐらした「輪中」と呼ばれる水防共同体が形成された。古くは上流側だけの「尻無堤」であったが、近世には「輪中堤」となり、その後、河川域を埋めるように小輪中が大きな輪中に統合された。その結果、木曾三川は輪中を網流することになり、河川域の減少から洪水の危険性が増した。とりわけ濃尾平野は

東高西低の地殻運動によって、西の揖斐川が最も低いうえ、1609年(慶長14)に尾張側に「御囲堤」という大堤防が築造され、その後、堤防がかさ上げされたこともあり、洪水は一層、美濃側で多発した。度重なる洪水を幕府も放置するわけにもいかず、1754年(宝暦4)、木曾三川の改修工事を薩摩藩に命じた。薩摩藩の工事は、莫大な費用と多くの犠牲者を出し、翌1755年に完成したものの抜本的な改修には至らず、その後も洪水は減少しなかった。

明治に入り、政府はオランダ人技師のヨハネス・デ・レーケを招き、巨額な資金を投じて木曾三川の改修工



図 15-2 2012年頃の輪中地帯 (20万分の1 地勢図「名古屋」平24要修、×1.05)

事に乗り出した。1877年(明治10)、デ・レーケは調査を開始、1887年(明治20)から周辺地域の砂防工事や三川分流、佐屋川などの河川の付け替えや直線化などの工事を進めた。1900年に三川分流工事が、そのほかの工事も1912年(明治45)に完成した。25年間にわたる大工事であった。木曾三川は、図15-2のように堤防によって隔てられて分流し、河口付近を除いて合流していない。このデ・レーケの砂防を重視した近代的な治水工事の結果、輪中地域の洪水は激減した。

その後も治水事業は進められ、輪中景観を特徴付けていた「堀田」などのクリーク景観は、土地改良事業

で埋め立てられ姿を消した。これらの治水事業により、不要と思われた輪中堤は取り壊され、洪水時の避難を目的に石積みの上に建てられた「水屋」建築は文化財に指定され、輪中のシンボルとなった。だが、デ・レーケの工事やその後の治水事業が、いかに優れたものであっても洪水は発生する。1958年(昭和33)の伊勢湾台風では、河口近くの輪中や干拓地が壊滅的な被害を受けた。1976年(昭和51)には、台風17号の大雨の影響で長良川の連続堤が決壊し大災害をもたらしたが、輪中堤が存続していた輪中は浸水を免れ、控堤としての輪中堤の重要性が認識された。(平岡昭利)

このプレビューでは表示されないページがあります。

## JAPANESE LAND THEN AND NOW

Survey Map Comparisons, Japan

よみたくなるちず こくどへん

### 読みたくなる「地図」国土編

日本の国土は どう変わったか

発行日 ————— 2019年3月18日 初版第1刷

定 価 ————— カバーに表示してあります

編 者 ————— 平 岡 昭 利

発 行 者 ————— 宮 内 久



海青社  
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4  
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688  
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>  
郵便振替 01090-1-17991

- Copyright © 2019 ● ISBN978-4-86099-346-7 C3025 ● Printed in JAPAN
- 乱丁落丁はお取り替えます

本書に掲載の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の100万分1日本、20万分1地勢図、20万分1輯製図、5万分1地形図及び2万5千分1地形図を複製したものである。  
(承認番号 平30情複、第976号)

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。